

プレス空知 2016年11月 深井尚子

ピアノの詩人、ショパンには、一般的に甘く優しい音楽を作曲する作曲家というイメージがあると思います。有名なノクターン作品 9-2 や雨だれの前奏曲などを思い浮かべるのではないのでしょうか。ショパンの肖像画を見ると、細面の華奢な体型でノクターンなどの静かで繊細な曲を作曲するようにも見えますし、現在、石膏などで残っているショパンの手も、細くて長い美しい形をしています。ところが、実は、ショパンの音楽のほとんどが、力強く、情熱的な楽曲なのです。私たち演奏家を取り上げるのは、バラード、スケツツオ、ポロネーズなどが多く、それらの曲はたいへん男性的なエネルギーに満ちています。また、よく演奏会で取り上げられる、「革命」、「木枯らし」のエチュードや、「英雄ポロネーズ」などは、ショパンの情熱が感じられる楽曲です。このショパンの情熱は、ポーランドへの愛国心から生まれたものだといわれています。

ポーランドは、16世紀に国としての最盛期を迎え、ヨーロッパで最も大きな国家として栄えました。しかし、18世紀後半に、当時のヨーロッパ3大強国といわれた、プロイセン（後のドイツ）、ロシア、オーストリア・ハンガリー帝国にポーランドは、3度にわたって分割され、1795年には、国家としてのポーランドは消失してしまいます。その後、ナポレオンによってワルシャワ公国が建国されたのですが、ナポレオンの失脚とその後のウィーン議定書によって、1815年にワルシャワ公国も解体されるなど、ポーランドは国家分割という悲劇的な歴史を持っています。ショパンは、1810年、ワルシャワ公国時代に生まれましたが、ポーランドの不安定な政情の渦中にありながら、音楽の才能を開花していきました。当時は、名ばかりの公国や他国の支配から独立と建国を求めて、多くの愛国者たちが蜂起を繰返していました。ショパンもその活動に賛同していたのですが、ショパンの友人たちは、才能ある若き作曲家ショパンに国外で活躍するよう勧めます。その結果、ウィーンを経由し、ショパンは、パリに到着します。パリに向かう途中、祖国では、ショパンの友人たちも参加していた、独立のための蜂起は、ロシア軍によって鎮圧され、ポーランドの祖国を取り返すことができなかつたことと、知人を失ったことを知ることになります。そのときの、祖国への想い、強い愛国心が、「革命」、「スケルツオ第1番作品20」の中に表現されているといわれています。蜂起には実際加わることができなかつたショパンは、音楽によって、その想いを作品にしたのです。ショパンは、内面に強い愛国心と情熱を秘めた作曲家ということが出来ます。ショパンは、1831年以来、パリに暮らし、そこで没しますが、生涯、祖国を想っていたといわれます。ショパンは、ポーランドの民俗音楽マズルカを50曲以上、また、ポロネーズも生涯にわたって書き続けました。人生の半分は、パリで暮らしながら、祖国の音楽を題材にたくさんの曲を生み出しました。ショパンの作品を鑑賞する時、ポーランドの歴史を少し知ることによって、見えてくることがあります。

ちなみに、ポーランドは、1945年の第二次世界大戦終結後、ドイツが敗戦したため、1795年以来解体されていたポーランドは復活し、ようやく国家として安定していくことになります。